

体験型海外教育実地研究 –第6 学年異文化理解教育 (English Language Arts の一部として)
Let's make onomatopoeia ! –

教育学研究科言語文化教育学専攻国語文化教育学専修 小笹 由花

1 はじめに

日本以外の国における“国語”の授業を見てみたいという思いは以前からあった。高校生の時、オーストラリアの高校でいくつかの授業に参加した際、あまりにも異なる授業形態に衝撃を受けたからである。教員を目指すようになり、自分が受けてきた教育が絶対的なものではなく、教育には多様な方法があるとわかった。全く無知な状態ではなく、教師という立場から再び他の国の授業を見ることで、何か得られるものがあるのではないかと考えた。

国語科においても、特に表現する指導において、生徒達が将来、国際化する社会で生きることが念頭に置いた指導もみられる。教室の中に国籍、人種、宗教の違う子は必ずいる。国際化が進む中、この先、教室にはどんな生徒達が集まるのだろうと考えた時、「人種のサラダボール」であるアメリカの教室を覗ける機会を逃すわけにはいかないと感じ「体験型海外教育実地研究」へ参加を決めた。

2 実地研究の日程と概要

		交通等	訪問地・用務等	宿泊地
4/8	水	12:10-12:40 L527	説明会	
5/7	木	14:40-16:00 L505	渡航までの日程や諸準備, 授業研究テーマの設定方法の確認	
6/4	木	14:40-16:00 L505	授業研究テーマ案の交流	
7/9	木	14:40-16:00 L505	学習指導案の検討	
7/30	木	14:40-16:00 L526	学習指導案の検討, 渡航のための諸手続き	
8/27	木	14:40-16:00 L505	学習指導案の検討, 教材・教具の作成, 渡航のための諸手続き	
9/3	木	14:40-16:00 L505	学習指導案の検討, 教材・教具の作成, 渡航準備	
9/9	水	14:40-16:00 L505	事前打ち合わせ	
9/12	土	広島-成田 0745-0925 NH-3128 成田-ワシントン 1105-1040 NH-2 ワシントン 1235-1340 ローリー UA-7144		(ノースカロライナ州 Greenville) City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 TEL(877)271-2616
9/13	日		<u>East Carolina University</u> <u>Welcome party</u>	(Greenville) 同上

			事前打ち合わせ (Mrs. Martina Graham)	
9/14	月		<u>C.M. Eppes Middle School</u> 授業見学	(Greenville) 同上
9/15	火		<u>C.M. Eppes Middle School</u> 授業実践 (Grade6, 3クラス)	(Greenville) 同上
9/16	水		私立校見学 <u>The Oakwood School</u> <u>Arendell Parrott Academy</u>	(Greenville) 同上
9/17	木	Greenville → (車) →Raleigh	<u>Kids Museum“Marbles”</u> <u>Exploris M.S.</u>	(Raleigh) Holiday Inn RALEIGH 4100 Glenwood AVE Raleogh, NC 27612 TEL:1-919-7828600
9/18	金	ローリー 1025-1130 ワシントン UA-197	<u>Washington DC</u>	(Washington DC) WASHINGTON PLAZA 10 Thomas Circle, N.W. Washington, DC 20005 TEL:202-842-1300
9/19	土		<u>Washington DC</u>	(Washington DC) 同上
9/20 9/21	日 月	ワシントン 1220-1520 成田 NH-1 成田 1725-1900 広島 NH-3129		機中泊
11/12	木	16:20-	事後指導 発表会	

3 実地研究授業

3.1 単元名 第6学年 English 「Let's make onomatopoeia!」

3.2 事前準備

授業者が国語の教師を目指しているということだけでなく、協力校の先生も国語の先生ということもあり、「ことば」を用いた授業によって他言語への興味、関心を抱かせることを目標とした授業を考えた。

しかし、アメリカから見れば日本はとても小さな島国である。仮に日本語をいくつか教えた

ところで何人の生徒にとって意味のあるものになるのだろうかという疑問が浮かんだ。もちろん、日本語を覚えることでいろいろと考えさせることはできる。しかし、他言語への興味、関心を持たせることを目的とするのであれば、他言語と比較して、似ているようで似ていない、伝わるようで伝わらないオノマトペが適しているのではないかと考えた。そこで本実践は、あえて、その違いを明確に示し、他の言語圏、文化圏への関心を抱かせるために、日本だけでなくヨーロッパなどの国々のオノマトペも扱うこととした。

3.3 学習指導案

Date: 2009/10/15

Grate Levels: 6

Subject: English Language Arts

Description: In this lesson, students will notice that they can communicate with people using onomatopoeia. And they will learn the similarities and differences between Japanese and American onomatopoeia.

Goal: This lesson will encourage students to have a rich vocabulary. It will also help students arouse their interest in their own language and foreign languages.

Objective: As the result of this activity, the students will be able to

- 1 Develop ways to describe their feelings.
- 2 Rethink their own language.

Materials: Resources and Technology: For this particular lesson, the teacher would need picture cards, “Alice’s Adventures in Wonder land” written in English and Japanese,・・・and so on.

Teaching procedure

Activity	Attention	Evaluation
Know onomatopoeia. Compare own words with	<p>◆ Ask the student about onomatopoeia.(show picture cards)</p> <p>What noise does this animal make?-ex. cuckoo, woof, cock-a-doodle-doo, quack-quack, moo.</p> <p>How do you say this sound?-ex. bang, buzz, hiss.</p> <p>How do you describe this condition?-ex. whoosh ...?</p> <p>◆ Show Japanese onomatopoeia and let students compare their own words with it.</p> <p>What animal makes this noise in Japanese?-ex. わん わん---dog, にゃーにゃー---cat.</p>	Watch the students’ reaction

<p>Japanese onomatopoeia.</p> <p>Know Japanese has many onomatopoeia, because Japanese doesn't have as many verbs as English.</p> <p>Choose one facial expression, and write down some onomatopoeia on paper.</p>	<p>(◆Cuckoo)</p> <p>◆Make students know that Japanese use much onomatopoeia by using meta-phrases from “Alice’s Adventures in Wonder land”.</p> <p>◆Show some picture cards. Let students make onomatopoeia and compare their words each other.</p> <p>◆Sum up the lesson’s points.</p>	
---	---	--

3.4 授業の実際

<導入>

本授業を行う少し前に、生徒たちは、担任教師からオノマトペについての授業を受けていた。そこで、本授業では、授業開始時に数人の生徒にオノマトペについての説明を求め、授業者がまとめるという形でオノマトペとは何かの確認を行った。さらに、動物などの絵を示し、英語のオノマトペを生徒たちに聞いた。鳴き声などを模倣した音を発することとオノマトペとの違いが明確でなかった生徒が多かったため、導入として非常に意味のある学習となった。

<展開 1>オノマトペの日米比較

次に、日本語のオノマトペを紹介し、導入で用いた絵のうち、どれを表しているのか生徒にクイズ形式で当てさせた。どの言葉もクラスの1/3程度が不正解となった。明らかに意味がはっきりしていることば、全く分からないことばを用いるよりも、似ているようで全く異なるオノマトペは、生徒の他言語への興味を持たせることができるものとなったのではないだろうか。他者の意見にとらわれず、自分はどう思うのかを優先するアメリカの生徒の特徴も幸いした。

<展開 2>他言語のオノマトペの紹介

さらに、カッコウの鳴き声のオノマトペを紹介した。「カッコウ」は日本とアメリカ以外の国（スペイン、ドイツ、フランスなど）にもオノマトペがある。日本語だけでなく、“他言語”への関心を持たせることがねらいだったため授業に取り入れた。国旗の国名を当てさせてみたが、答えられる生徒はいなかった。一つも正解が出なかったことは予想に反したが、知的好奇心を呼びおこせたため、非常に盛り上がった。オノマトペに関してもヨーロッパのものを中心にあげたためか、生徒達は興味津々であった。

日本語には、オノマトペが多いと言われている。そこで、「不思議の国のアリス」から引用した文章を用い、英語には対応する語がないオノマトペを紹介した。



【写真1：授業中】

以下、《不思議の国のアリス》より引用部分

- ...she remembered trying to box her own ears (ぴしゃぴしゃ叩く)
- ...and the small ones choked and had to be patted on the back. (とんとん叩く)
- ...then it watched the Queen till she was out of sight: then it chuckled. (くっくと笑う)
- ...though still sobbing a little now and then, (しくしく泣く)
- ...and he went on muttering over the verses to himself: (ぼそぼそつぶやく)
- ...had got the face of a little old man, and grinned at her. (にたにた笑いかける)
- ...She was getting a little giddy with so much floating in the air, (ふわふわ浮かんでいる)
- ...But how curiously it twists! (くねくね曲がっている)

<展開3>オノマトペの創作，交流

最後に、悲しみや嫉妬など、子どもの多様な表情の写真が並んでいるプリントを配布し、その中から一つ選ばせ、オノマトペを作らせた。そして、何人かの生徒のオノマトペを発表し、どの表情か他の生徒に考えさせた。ことばだけでは、なかなか伝わらない体験をさせることで、ことばの限界と可能性に気づかせることができた。

<まとめ>

授業のまとめとして次の言葉でしめくくった。

‘There are many languages in the world. And they use different descriptions. Because we have different minds and cultures. So sometimes we can’t understand each other. Words cannot describe everything. Here we couldn’t understand all the facial expressions. Please remember that words are not perfect, but we can make many descriptions.’

3.5 考察

授業において、生徒たちは他の言語のオノマトペに強い関心を示していた。日本だけでなく、ロシアやドイツ、フランスなどの言葉と比較したことは言語に関心を向けさせる良い題材にな

ったといえる。

さらに、<展開 3>では、自分の考えたオノマトペをみんなに聞いて欲しい、意味を当てて欲しいという積極的な態度を示す生徒がほとんどであった。自国、他国にかかわらず、ことばに興味を持ってほしいというねらいは一応、達成された。しかし、授業後、知っている日本語の意味を聞いてくる生徒や挨拶など簡単な言葉を日本語で何と言うか聞いてくる生徒は3クラスともいたものの、少数であった。もちろん、日本語に限定して興味をもたせることを目標としていないため、日本語を知りたいと思わせられなかったことが、必ずしも目標を達成できなかったことにはならない。実践校には休み時間がなく、皆慌しく教室移動しなければならないため、落ち着いて質問できないというのもあった。しかし、本当の意味で言葉に興味を持たせるためには、オノマトペから他の語句に目を向けさせるアプローチが必要であり、それを十分行えなかったことが悔やまれるのも確かである。

4 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

以下、特に印象的だった4点について自己変容の観点から考察する。

1) 距離・目線の違い

日本の教師に比べ、アメリカの教師は生徒との距離、目線ともに遠かった。先生は敬うもの、先生の指示には絶対に従うものであるという意識が生徒、教師とも強かった。実践において日本の教師のように傍に寄り、目線を同じにして生徒と向き合ってみた。最初は生徒に戸惑いがみられたものの、素直なひと言や正直な疑問を話してくれた。確かに教師と生徒という立場の違いを明確にすることも大切だが、



【写真2：授業中の生徒との関わり】

教師目線だけでなく、個々の生徒と同じ目線を持ちつつ向き合おうとする姿勢は、アメリカにおいても有効であり、生徒にとっても必要なものであると実感した。

2) 言葉遣い・態度の使い分け

生徒が教師の指示に従わなかったとき、指示を正確に聞き取れなかったときなど教師は非常に強い口調で生徒を叱責した。呆れたポーズをとり、指示を繰り返さないこともあった。適度な緊張感は学習集団の中には必要である。緊張感と安心感のバランスをとることが非常に難しいことであると改めて感じた。

3) 1対1の関係づくり

生徒たちは気付きや疑問点、考えたことなどを教師には積極的に発言していた。しかし生徒同士での話し合いが起きることは全くなかった。日ごろはどのような会話をしているのか、他の單元ではどうか、他教科ではどうなのかはわからなかったため、どう判断していいのかわからない。グループでの学習活動が積極的に取り入れられている日本の教育現場を

思うと、教室の机がグループ形式なだけに非常に不思議に思った。ただ、教師に対する信頼が非常に強いのが感じた。Graham 先生は「生徒達は私を尊敬している」「生徒達と私の間には信頼関係がある」と胸をはって答えた。日々の努力の上にこのことばがあるとなれば、それを堂々といえるぐらいの関係を築くことができていることに感心した。

日本の教育現場における考え方や姿勢が、アメリカにおいても十分通用する方法であることがわかり、自信をつけることができたものがある反面、アメリカでは上手くいかなかったため日本においても本当に有効な手段であるのかについて考え直すきっかけになったものもあった。文化はもちろん、制度、組織、目標なども異なるからこそ、あえて日本の教師らしい授業を行ったことで、ほんの一部ではあるものの、日本の教育の特徴を実感することができた。また、“教師”という立場から日本以外の授業を観察した経験がなかったため、授業観察やアメリカの教師との対話は、新しい考え方や見方を得る貴重な経験となった。

4.2 自分自身についての変容

アメリカの先生や生徒との交流は、日本にいれば「当たり前のこと」としてあえて考えることのなかったことを意識するきっかけとなった。特に Graham 先生との交流では「日本ではどうなの?」「どうしてそうするのか?」「いつもどうやっているの?」などを聞かれることが多く、日本の文化、教育制度、気質のもとでの「当たり前のこと」を説明することが難しかった。言語の力不足も原因ではあるが、何故その方法をとるのか、いつもはどうやっているのか、について非常に曖昧な認識しかなかったことが大きな原因であると考えられる。一時間の授業のなかで重要なアプローチについてだけでなく、ほんの些細な言葉かけや動作、日常生活における生徒との関わり方についてももっと考えていかなければならないことを実感した。

授業の実践にあたっては、いかに簡潔に、わかりやすく説明し、生徒達に興味を持たせることができる授業にするかを追求した。すべての生徒がわかるにはどの言葉を使うべきなのか、6年生の生徒に授業をすること自体初体験であり、さらに異なる文化をもつ生徒達のスタンダードがどんなレベルかもわからなかったため授業作りは非常に難しかった。しかし、今回の授業は、今までで最も、使う言葉、態度に集中して作り上げたため、改めてその重要性を認識する機会となった。

4.3 グローバルマインドに関する変容

授業観察や先生との交流から前々から感じていた海外の授業との大きな違いは、ほんとうに小さなことであると感じた。教師が意識する以前に伝統的にそうなっているスタイルの違いは確かに全く異なるため、そちらに意識が向きがちだが、生徒の理解を促すための発問や方法などは共通するものも多く見られた。異なる文化圏の教育として割り切ってしまうと見なければならぬ部分はある。しかし、そこに留まらず、同じ母国語を教える者という立場から見ることによって自分の授業をもっと豊かにしていけることに気づかされた。

アメリカの教室にいた人種も宗教も親や先祖の出身国もバラバラな子供達は、そこに特に気

をとめることもなく、ただ当たり前クラスメイトとしてみていた。肌の色、言葉、文化が違う生徒達にどのような指導的アプローチが必要かという限定的な見方をしていたことを恥ずかしく感じた。広汎性発達障害のある子や家庭環境が複雑な子などの支援を必要とする生徒達だけでなく、性格や特性など様々な生徒が教室には存在している。「同じ」日本人だけれども「違う」、「違う」けれど特に問題なわけではないという空気をまず作っていく力を身につけたいと感じた。文化の影響か交流した生徒達は「自分」というものを強く持っていた。陰湿ないじめや閉鎖的な人間関係が嘆かれる学校現場において、「自分」を持つことは重要なポイントのように感じた。他者を理解し、受け入れることのできる人間関係を作ることの大切さを国際的な人とのかかわりから学ぶことができたように思う。

5 おわりに

「体験型海外教育実地研究」の計画・実施にあたり数々のご配慮をいただいた、GPSC の関係者の皆様に心より御礼申し上げます。本研究への参加によって自らの教育観、生徒との関わり方だけでなく、ものの見方や考え方を見直すことができました。ここで得たものを今後、教育現場で生かせるよう、努力していきたいと思えます。

最後に、貴重な授業時間を快く提供していただき、授業実施にあたっては多くのアドバイスをいただき、手助けをしてくださった C.M. Eppes Middle School の Graham 先生に心より感謝いたします。

引用・参考文献

田守育啓, Lawrence Schourup, オノマトペ, 1999. くろしお出版
田守育啓, オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ, 2002. 岩波書店